

「日本・アジア文化と人間」プロジェクト研究報告

2013 Annual Report

‘Japan and the Asia culture, and a human being’ Research Project

椋山女学園大学文化情報学部教授

飯塚 恵理人
Erito lizuka

「日本・アジア文化と人間」プロジェクトでは昨年に引き続き、構成員個人がそれぞれ大きなテーマとして「日本・アジア文化と人間」を据えて各自の研究を継続した。梅野研究員、富田研究員より下記の報告を受け取ったので、梅野研究員分と富田研究員分と飯塚分を記す。

梅野きみ子

1) 名古屋国文研究会

(本学名誉教授梅野きみ子研究員主催)

名古屋国文研究会のメンバー（名古屋・京都近隣からの女性研究者二十名程）が、4月6日（土）、5月11日（土）、6月15日（土）、7月6日（土）、8月3日（土）、9月7日（土）、10月5日（土）、11月2日（土）、2月1日（土）、3月1日（土）、それぞれ午後1時30分～6時まで、椋山人間交流会館会議室において、『風葉和歌集』の注釈研究のための発表会をした。その成果は、『風葉和歌集研究報』18号として発刊した。

なお、『風葉和歌集研究報』は18号までで、後は休刊とし、それ以降の研究会の活動発表方法については、叢書出版のための原稿作成に切り替える。『風葉和歌集』は、全18巻で、1,408首を所収する物語和歌集であるが、まず巻六冬443首までを、『風葉和歌集』注釈

の一冊の四季の部として纏めることにした。現在のところ、冬の巻388首までは読了した。

これまでは、一年で50首を目指してきたが、これからは、出来上がった原稿を、著書の体裁に整える作業があり、例会の研究会以外の時にも、会員が研究室に置かせて頂いている資料を見るために、出入りさせて頂くと思われる。また、本年度からの研究会は、資料整理の打ち合わせも兼ねて、四季以降の歌の注釈も進めるという二本柱である。

2) 『源氏物語』の注釈研究会

(本学名誉教授梅野きみ子研究員主催)

本研究会では、風間書房からの共著『源氏物語 注釈十』（早蕨一東屋）を刊行するための原稿を作成中であり、交流会館において随時打ち合わせをさせて頂いている。本書は、梅野きみ子・岡本美和子・嘉藤久美子・佐藤厚子（椋山女学園大学教授）の4名と、数名の協力によるもので、本年6月の出版を目指している。

富田和子

日本人は、15世紀末期に連歌から俳諧を独立させ、17世紀後半にその芸術性を高めた。そして、現代の俳句・川柳などや国際的なHaikuに継承させた歴史を持っている。

今年度は前年に引き続き、18世紀以降、近世後期以降の俳諧資料の収集と整理（科学研究費受給対象研究）を中心に、当該資料の収集と整理に努めた。この成果の中から、京の俳人・雑俳点者である雲鼓の門人の一人で、京に住み、雲鼓の吹簫軒を継いで、18世紀前半の享保期から寛延にかけて雑俳点者として活躍した雲鈴（1674～1751）に着目し、東海近世文学会7月例会で、研究発表「寛延三年京雲鈴撰地方会所本にみる雲鈴の動向」を行った。これについて論文を執筆中である。

また、雲鼓流雑俳興行は京の他、江州（滋賀県）・勢州（三重県）などの地方会所と連携し、名古屋の愛好者も多く参加したことが知られる。そして、その特徴の一つに、十番組毎に前句付や笠付ではない、長句など破調の句が置かれる傾向が指摘される。これは東海地方で現在も愛好される狂俳興行の様式と似る。そこで、その傾向の顕著な『花の遊

び』を含め、「雲鈴撰会所本『花の遊び』『鶯の初音』の紹介と翻刻」（梶山女学園大学研究論集45号 平成26年3月発行予定）にまとめた。

飯塚恵理人

飯塚は平成25年度、所属する「メディアと古典芸能研究会」で、「昭和20～40年代における東海地域民間放送資料の収集・保存」という題目で、「公益信託高橋信三記念放送文化振興基金」より50万円の助成金を頂いた。今年度は、梶山人間学センターのプロジェクト研究費用及びこの助成金を用いて、草創期の民間放送の放送劇団関係資料と放送音源の収集・整理、およびそのアーカイブ化を行った。この成果については、『人間学研究』（本誌）に「民放草創期放送音源及び放送劇団関係資料の収集・整理とアーカイブ化報告」として掲載している。